

「洞窟」をめぐる問題

— プラトン「国家」篇、洞窟の比喩について —

國嶋 貴美子

「国家」篇で語られる太陽、線分、洞窟という三つの比喩は密接に関連していわゆる哲人王という考えを説明するが、洞窟の比喩の「洞窟内の模型とその影絵」と線分の比喩の「信念の対象と想像の対象」との対応は古来から問題にされてきた。以下では一八九四年以降の英米の研究を幾つか取り上げてこの問題に関する解釈を検討し、その難点を考察する。

比喩の概要

不正な人は不幸である——これを明らかにするためソクラテスは正義を考察するが、魂より大きい国家における正義の方が見易いため(369a)、先ずは様々な国制とその悪とを論じる。その過程で愛知者が王となつて導かなければ正しい国家は実現しない(473d)と語つたことから、愛知者が問題になる。

知識は有に、無知は非有に、思ひは両者の中間の生成に関わるが(473c-487a)、愛知者は有るもの、アイデアの知識者であり、生成する感覚的個物を思う者ではない。多くの美しい個物には唯一の美のアイデアが対応し、前者は見られ後者は思惟される——こう同意された後、太陽に擬えて善のアイデアが知識と存在との原因であることが説明される。光無しには視覚が生じないように、善の発する有と真理とが無ければ知識は生じない。明るい物は明瞭

に見えるが暗い物は不明瞭にしか見えないように、善の照らすアイデアは明瞭に知識できるが光の乏しい感覚的個物は不明瞭に思うだけである(太陽の比喩、507b-509c)。

続いて知られるものと見られる物とが不等な比で分割された一本の線に喩えられる(線分の比喩、509e-511c)。先と同じ比で前者は思考と考量とに、後者は信念と想像とに分割される。想像は影、信念はその実物(個物)、考量は数学の主題、思考はアイデアを対象とし、四つの情態の明瞭さは対象の真理性に対応する(511a)。個物(信念)とその影(想像)、實在(知識)と生成(思い)の比は実物と似像との関係を示すが(501a)、アイデア(思考)と数学の対象(考量)も同じ比である。考量は個物を援用し、奇数や図形(510c)などの仮定ヒポテシスを説明なしに考察の始めとするが、思考はアイデアだけを扱い、仮定の元にある無仮定の始原アルケーへと遡つて仮定を説明する。

次に、無教育な人は地下へと下る洞窟の底の囚人たちに喩えられる(洞窟の比喩、514a-519b)。洞窟の上方に燃える火と囚人との間を生物の模型が移動し、その影絵が壁に映る。囚人は縛られて影絵しか見えず、影絵を實在だと思ふ。囚人が解放されて火の方を向いても目が痛んで何も見えず、地上に登れば目が眩む。まずは生物の影で目を慣らし、次に生物自体を見、太陽を見るのは最後になる。——洞窟は感覚され思われる物、火は太陽、地上への登攀は思惟されるものへの魂の上昇、太陽は善のアイデアであり、教育とは魂を転向させ光に慣らして善を見させることである(517b-c)。魂の転向は、感覚だけでは判断できず思惟を促すものを扱う数学の働きであり(523c)、生物自体や太陽を見させるのは対話法である。数学は対話法の序曲(531d)とされ、両

者は仮定の扱いの点で思考と考量と同様に区別される。囚人たちは影絵を見分け出現を予測する人を賞賛するが、地上から戻った人は「正義の」(517c)影絵や模型を見分けられず法廷で嗤われる。しかし闇に目が慣れれば地上の実物を見た人の方がよく見分けられるから、対話法によって善を見た愛知者は地上に留まらずに嫌でも洞窟に降りて囚人たちを世話し導かなければならない。

「洞窟」の問題点

洞窟の比喩は、善を太陽で、実在と生成とを明暗で表す点では太陽の比喩と、数学と対話法とを実物と似像に喩える点では線分の比喩と共通する。また洞窟は感覚の線分に、地上は知識の線分に、生物(対話法の対象)は思考の線分に、その影(数学の対象)は考量の線分に相当する。しかし模型は信念の線分(感覚的個物)に、影絵は想像の線分(個物の影)に限定できない。囚人は影絵しか見えないが、個物の影しか見えない人はいないからである。

ファーガソンらは、感覚の線分は知られるものを説明する手段であり、洞窟は現実の政治を批判する表現であってどちらも「思い」を意味しないとす。それなら両者が一致する必要はない。

しかし感覚の線分と知の線分とが連続していることや、四つの線分に対して四つの情態が生じる(Stile)とされることからして、感覚の線分は思いの情態を示す。また愛知者が導いても洞窟はなくならないから、洞窟は現実の社会であると共に無教育な人の情態、思いでもある。

マフィーは、洞窟内の模型と地上の生物の影とを同じ情態の別の表現と看做し、洞窟の比喩は思い(影絵)、考量(模型)、生

物の影)、思考(生物自体)という三段階を示すとす。——しかし洞窟は見られる物、地上は思惟されるものとして区別されるので、洞窟内の模型と地上にある生物の影とは同一視できない。以上からして、洞窟全体が見られ思われる物を表し、模型と影絵は信念の線分と想像の線分とは別の仕方でも区別される。

アダムや、ジョウエットとキャンベルは、「正義」の(517d)模型は制定された法、影絵は法廷弁論家の法の解釈と看做し、クロスとウッズリーも影絵を弁論家や政治家やソフィストに騙されて何かを正しいと思う情態と結びつける。——しかし若者に思いを植えるのは法廷や劇場で騒ぐ大衆であり、ソフィストはその迎合者である(492a-493c)。アナスやネトルシップの言うように影絵は一般の人の社会的通念を含み、ソフィストの言論に限定されない。また十巻では詩や絵画がアイデアの似像(個物)の見かけを真似た影像とされることから、ガスリーやネトルシップは詩も影絵であるとする。三巻で論じられる初等教育は影絵(諸徳を語る物語)によって思いを植えるものである。以上のように影絵の解釈はさまざまであるが、どの場合も影絵を見る人は他からの思いを無批判に受け入れている。他方、模型を見る人は自分で思いを巡らせる、とアナスやクロスとウッズリーは解釈する。

しかしこの解釈では何故数学によって影絵から模型へと転向し、他から思われずに自分で思うようになるのか説明されていない。この点を論じるためには、数学に関するプラトンの考えを広く考察し、数学の対象と感覚的個物との関係や、正義などのアイデアと数学の対象との関係を明らかにしなければならない。